

【総説】

「物のあはれ」攷

——舜庵・本居宣長の医学思想との関わりから——

中醫クリニック・コタカ 小高 修司

国学者として名声の高い本居宣長（一七三〇・六・二——一八〇一・十一・五）の基本思想の一つは「物のあはれ」であろう。本思想に関しては既に多くの論攷が発表されており、一方で医師としての宣長を論じた論文も見られる（1, 2）が、「物のあはれ」の論拠として、宣長の臨床経験に基づく医学思想を取り上げた説は渉獵した限り見あたらない。つまり「物のあはれ」の発想を育てる上で宣長の医師としての経験が大きく関わっていたのではないかというのが本小論の趣旨である。

引用資料の「全集」とは筑摩書房版『本居宣長全集』である。『源氏物語玉の小櫛』は全集版と共に『版本文庫2、寛政十一年刊受須能耶版』の早坂禮吾翻刻（国書刊行会、昭和四十九年刊）も用いた。『不盡言』は新日本古典文学大系第九十九卷（岩波書店、二千年刊）を用いた。

1, 宣長の医歴に関わることも

伊勢松阪の旧家、木綿問屋小津家の長男として生まれたが、父の代に手代のために資産を失った。母・勝子の明察は宣長の商人たる性格でないことを見抜き、学者としての天分を生かすべく、さらにその生活の基を築くために医師になることを勧めた。宣長の『家のむかし物語』（全集第二十巻）には、「宝暦元年、此の時江戸の店は…皆すでになくなりて…恵勝大姉（注、母かつ）みづから家の事をはからひ給ふに、跡つぐ彌四郎（注、後の宣長）あきなひのすぢにはうとくて、ただ書をよむことをのみこのめば、今より後、商人となるとも、事ゆかじ、又家の資も、隠居家の店おとろへぬれば、ゆくさきうしろめたし、…然れば彌四郎は、京にのぼりて学問をし、くすしにならむこそよからめ、とぞおぼしおきて給へりける」とある。

また京都留学中にこの母から寄せられた手紙の一つに「随分随分無事にて、心つよく思い、外の義に心うつし不申、唯唯一筋に醫者の方心がけ、申すまでは無く候へども、人間心一筋をつよく、道々を専一に可被成候」とあるを見ても、慈愛あふれる中にも厳しさを含んだ母の思いが宣長の学問・医の修練に大きな影響を与えたことは十分推測できよう。更に宣長の医療に対する基本姿勢は、「家で講義をしている途中でも、往診を頼んでくる人がいれば、『人の生命にかかる事であるから、暫し御免を蒙る』と中座して病家に赴き、帰ってくればまた講義を続けられた」（3）という言い伝えからも理解できる。

そもそも医療において最も大切なことは知識・技術以上に、病気に苦しむ患者への思いやりであろう。「医は仁術」という古諺は当にそのことを云っている。私は仁と恕を次のように理解している。「恕とは、まごころによる他人への思いやりであり、そこから己を愛するが如く他人も愛すること」、「仁とは、人間の自然な愛情に基づいた、まごころの徳であり、つまりは恕の感情に基づき、天地自然界の生きとし生けるあらゆるものを憐れ

み愛する心である」と。

様々な古典・和歌を学ぶことで豊かな感性を築き上げてきた宣長であるからこそ、開業し実際多くの患者を診療する過程で、自分の医学知識・技術の乏しさに悩みつつ、時には患者の死を看取らざるを得なかったであろうことは十分推測できることである。こういった状況の中で医師が考えることは、少しでも患者に生きる希望を与えることであり、それは仁恕の心から発するものであろう。それを宣長は「物のあはれ」という言葉で表現し、その言葉の持つ意味を幅広く解釈するようになったと思われる。「なほいはば、儒仏の教とは、おもむきかはりてこそあれ、物のあはれを知るということを、おしひろめなば、身ををさめ、家をも国をも治むべき道にも、わたりぬべき也。人のおやの、子を思ふ心しわざを、あはれと思ひしらば、不孝の子はよにあるまじく、民のいたつき、奴のつとめを、あはれとおもひしらむには、よに不仁の君はあるまじきを、不仁なる君不孝なる子も、よにあるは、いひもてゆけば、もののあはれを知らねばぞかし」という『源氏物語玉の小櫛』(全集第四卷) 二の卷「なほおほむね」にある言葉は、いわゆる漢意^{からごころ}を越えた大和言葉として述べているが、これも同じ発想からのものであろう。

宝暦五年三月三日、名を宣長と改め、春庵(或いは葬庵、宝暦九年秋頃よりは舜庵)と号したが、開業前(宝暦六年)に著した『排蘆小舟』には殆どこの「物のあはれ」という言葉が見られなかったのに対し、開業後六年を経過した宝暦十三年に著された『石上私淑言』には「物のあはれ」が多数記されている事実からも納得しうる。その意味において宣長の医療に対する基本思想の認識が高まってから付けられた「舜庵」を本稿では用いたい。

では宣長の医学における学問軌跡の概略を見てみよう。

宝暦二(一七五二)年、京都の儒者として名高い堀景山の門に入り、儒学を学んだ。更に宝暦三年より堀元厚に入門し『靈枢』、『素問』、『局方發揮』、運氣論などの講義を受けた。堀元厚は折衷派の曲直瀬玄朔の弟子饗庭東庵の流れを受けた、いわゆる後世家別派に属する医師である。富士川游が『日本医学史』でこのグループを「劉医方」と名付け、金の劉完素の学を伝えるものと規定したが、これは誤解であり、劉氏とは実際は運氣論を説いた劉温舒である(4)。彼らの医学は中国伝統医学の理論を詳しく確実な形で把握したが、そこには解剖学的臓腑の否定があり、「精神気血営は五臓の本にして、肝心脾肺腎というは末なり」といい、根源としての気の重視が見られる(5)。これは後述する宣長の唯一の医論である「藤文輿が肥へ還るを送るの序」(全集第十八卷「詩文稿」)の中にあり。詳細は後述)にも明かである。宣長の師である堀元厚の著書『隧輸通攷』には堀景山の跋が見られ、二人の師同士の交友が示唆される(6)。その内容(7)(原漢文を意釋)は「(『隧輸通攷』を著すにあたり)先頃(屬)私は一言を需められた。私は素より医理には闇いのだが、君は私と常に交際(雅游)しており且つ同族でもある。誼みから断る(峻拒)わけにもいかない。後世には、道を略(=治)め、能く経窳(=穴)を知る(者)鮮く、いつも(輒)妄りに攻め達しようとする。故に(所以)古とそむきあうので、十全に攻めることができない。かくのごとし(云爾)」と、宣長が「藤文輿が肥へ還るを送るの序」に書いたものと同じく、当時の医師の努力が足りないことを歎いており、宣長のこの「序」の内容が二人の師匠の考えを踏まえたものであることが示唆される。

宣長は堀元厚から医学古典を学びつつ内科医としての修練を積んだと考えられる。元厚が宝暦四年一月に死去してから、同年五月に宣長は小児科医として有名な武川幸順に師事した。このことから宣長は小児科医であるとも言われているが、実際の診療記録『濟世録』をみても内科の患者も多数診ており、武川に師事したことは、小児科の手だても学ぶことで診療の幅を広げるためと解釈すべきであろう。

在京中にまとめられた処方集とも云うべき『折肱録』には「張仲景傷寒論摘方」として桂枝湯以下八十九処方挙げられている。生薬名は略記されており、官（桂）、余（芍薬）、卑（麻黄）、走（附子）などである。次いで「同金匱要略摘方」として瘧濕喝病には栝楼桂枝湯以下九処方、百合狐惑陰陽毒病には百合知母湯以下九処方が列記されている。さらに「眼科秘書」「一本堂家方抜粹」と続き、終わりに「方剂歌」、さらに「驚口瘡伝薬」「消脹丸」「疥癬浴湯方」「屠蘇」「延壽反魂丹」「奇應丸」など家伝薬と思われる処方がまとめられている。ちなみのこの「方剂歌」は後に五十四首から成る浄書本として明和三年頃にまとめられた（8）。

宝暦七年九月に堀景山が死去し、これを機に宣長は帰郷を決意し、十月六日に松阪に帰り、早くも翌日には自宅で開業したという。

2、宣長在世中の気候について

因人因地の言葉に含まれるように、気候が健康状態に大きな関わりを持つことは明らかである。寒冷気候を背景として、漢代に張仲景により狭義の傷寒病への対応を記した『傷寒論』が、唐宋時代の気候温暖化に伴う温病系統の流行に対応するために、宋代に大幅な書き換えが行われ、宋板『傷寒論』として著されたことについては既に発表（9）した。しかも日中両国において余り流布しなかったこの宋板『傷寒論』系統の本を、驚くべきことに宣長の師の堀元厚の師匠である饗庭東庵が『張卿子集注傷寒論』（一六五九年刊）として江戸時代に刊行しているのである。ただ本書は残念ながら文献考証学的には誤謬が多いという。いっぽう饗庭東庵の師である曲直瀬玄朔らにより、一六二〇年代に日本最古の『注解傷寒論』系統の古活字本が刊行されているので、宣長がいずれを読んでいたか確認する必要がある。

宋板『傷寒論』とは、一〇五七年に宋政府の命により設立された校正医書局で、宋代に存在していた種々の『傷寒論』を参看しながら、林億等の儒官達が一六六五年に編集したものであり、諸本による条文の相違などは小字注などの形で注記されている。いっぽう成無已により著された『注解傷寒論』（一一四四年刊行）は、その元本である宋板『傷寒論』の簡略本であり、これらの小字注を総て削除し、また不可篇条文の多くを削除しているなど、宋板『傷寒論』とはかなり異なった版本ではある。ただ基本的な病理観は一致しており、いずれを学んだとしても同様の認識を持つはずであるが、ただ宋板『傷寒論』が漢代と異なる気候を背景として著された温病（広義の傷寒に属する）系統の本であるという認識を持っていたかどうかは問題にする必要がある。

ここで宣長記念館所蔵資料を見ると、香川修庵の『傷寒論』が所蔵されている。是は『小刻傷寒論』（一七一五年初版）であり、本書は成無已『注解傷寒論』を底本に宋板で校正したものだが、相互に異同が多く、校勘が示されていない㊦という。同所蔵本の中で興味深いのは、『温疫論』（一六四二年刊、呉有性）という温病の本が含まれていることであ

る。当時見ることが出来た宋板系統の『傷寒論』は、気候史の観点からすれば、むしろ温病に対応するものであるのだが、こういった認識は当時無かったと思われる。ただ興味深い手紙が残されている。それは五十六歳の時（天明五年九月）の小篠敏宛書簡（全集第十七巻）に『温疫論』について「（本醫書を貴方は）奇々妙々に思われているようだが、甚だ心得違いであって、右の書は何の役にも立たないのではないのでしょうか。今の症に符合いたしているように思われるからといって、是を信じるということは、醫の愚昧ではないのでしょうか。このことはもっと議論すべきことでしょう。また其の薬方も益があるとは思えません。もっといろいろ工夫すべきことです。」このように宣長も『傷寒論』を漢代に著された版本と同じく狭義の傷寒に対応する書籍と見なしていたためかどうかは不明だが、温病に対応すべき『温疫論』を読んでいたものの、詳細は不明だが批判的評価を与えている。実際の彼の温病に対する治法は不明であり、この意見を踏まえれば、彼が温病系統の疾患に対し如何なる対処をしていたか興味惹かれるところである。

次に「物のあはれ」論形成に大きく関わったと思われる、臨床医としての基礎固めの時期の気候や疫病の流行がどのようなものであったかを検討するために、当時の気候史^③を調べた。当時流行していた外感病が、狭義の傷寒に相当するのか、それとも温病の治法が適応したかを考えるためである。併せて宣長の『日記』（全集、第十六巻）を参照した。医療日記である『濟世録』は、安永七（一七七九）年以降のもので、今回の検討対象時期より遅く該当しない。

本題に入る前に宣長も学んだ運氣論に触れておこう。五運と六気を組み合わせて、気候気象や気候と医学現象の関連性を説明する学問であり、天・地と人との関連を述べるとも云いうる。基本的に干支に対応するために六〇年の周期性を有することになる。一年の六季の正常な気候推移の規律を説明する「主気」と、異常な気候変化を説明する「客気」の推移を見るのが本来の姿である。では以下に宣長の医歴と対照させながら気候変化を見ていこう。

開業の年（宝暦七、一七五七年）の特記すべき気象を列記すると「四月東海道関東奥羽諸国洪水、五月加賀美濃尾張近江洪水、七月関東中国諸国洪水。五-七月筑前不雨。六月紀伊降雪雹。北海道少雪」、翌宝暦八年は「因幡不雪。八月越中洪水」、『日記』によると五月末から六月上旬に大雨、大水の記述が有る。

宝暦九年は「因幡暖冬寡雪。閏七月陸奥・八月摂津洪水」、『日記』では「今春以来四月まで早多く雨少なく乾き、春の雨乞いは珍しい」と記す。宝暦十年は「四～八月江戸山城旱魃」、『日記』では五月二十一日に「今年、水無く百姓田植えに難儀。時々雨は降るものの水無し。今に至るも田植え出来ない処もあったのに、昨日より今日まで雨が降り田植えが出来ている」と旱の状況が見られる。つまりここ二年は温病の流行が示唆される気候であったことが解る。宝暦十二年は「三月飛騨大雪。五-六月諸国旱魃」、『日記』では一、二月、三月初めまで「余寒甚だし」の記述多く、九月上旬以後大雨の記録多く「今月二十日夜、宇治大水、百年来未曾有の由。鳥羽磯辺のあたりも大水」、そして年末に「今年冬と寒中の寒気殊に甚だしく、立春以後寒気緩む」と、傷寒の流行が示唆される状況である。

明和二（一七六五）年は「四～七月奥羽諸国旱魃。四月山城尾張江戸・五月加賀大雨洪水」、『日記』では「五月上旬と利月中大暑」「六月土用中暑気緩む、残暑に至り甚だし」、

そして年末には「今冬寒気大概、末に至り緩み、立春後寒厳しく、総体風少なし」と、気候変動の激しい年であったことが解る。翌明和三年は「六～八月近畿以西旱魃。関東霖雨洪水。六月加賀江戸大雨洪水」、『日記』では正月九日に「巳刻前より雪、晩にいたり積雪一尺三四寸、或いは二尺。この如き雪予未だかつて見ざる也、夜に入りても尚止まず」、一、二の月末には「今月余寒甚だし」と記し、六月には雷の記載日が十一日に及んでいる。年末には「寒気は小寒の間厳しく、大寒にいたり緩む」とある。

明和四年は「四、六月は筑前筑後に、七月には尾張三河大雨洪水。陸奥冷夏。夏秋阿波旱魃」、『日記』でも「七月十二日、尾張三河大水、溺死者数知れず」とある。この年十一月の末尾に「今月十七日より発熱し、健蔵疱瘡」とあり、更に翌年の元日に「母人卒去し給う。享年六十四歳、旧冬十二月十六日より傷寒を煩い給う」と身内の疫病罹患の記事が続き、当然一般患者にも傷寒が発生していたと思われる。

明和五年は「五月諸国洪水・鎌倉降雪一尺。六月京都暴寒降霜」とあるのだが、『日記』では七月に「大風雨、洪水」の記事くらいで平穩の年のようである。しかし翌明和六年「二～三月と八～十月諸国流感流行死者多数。四月北海道大雪風。六月筑前美作・八月山城・九月磐城と洪水続く」と、この年はインフルエンザと思われる伝染病が猖獗しているのだが、『日記』ではそれらしき記述は見られない。明和七年「五～八月関東以西旱魃。十二月諸国暖。九月日本諸国疫疾流行死者多数」これは温病であろう。『日記』では七月五日に「去る六(五か?)月中は早で水乏の処、後六月上旬に一度雨有るも、その後また大旱渴水、諸国一同の由、之により暑気殊に甚だし」、七月末に「今月中猶残暑甚だし」と、気候史と同様の記述があるが、疫病流行の記事は見られない。明和八年「三月琉球諸島洪水。三月京都大雨洪水。四月相模伯耆江戸降雪。四-六月奥羽関東以西旱魃。六月播磨洪水」。『日記』では七月に「昨夜大雨、今朝洪水」の記述が有るのみである。明和九年八月二日の『日記』には「今夕江戸大風雨、洪水、高潮、尤も風烈しく、大名屋敷多く壊毀し、浅草本願寺堂など吹き仆れる。深川品川辺り洪水、高潮、民家多く沈没、総じて江戸中圧死溺死の人夥しの由、前代未聞大變の由也」とある。安永四年十二月の『日記』に娘二人が発熱し疱瘡に罹患したことが書かれており、閏十二月には「今冬痘瘡大流行」の記事がある。安永五年四月には「麻疹流行、この地は二月下旬より始まり、三月下旬に至り、四月上旬の間尤も盛ん。…西国より始まり、次第に東国に移行の趣也。…凡そ天下諸国残る所無く、先に二十四年以前酉年流行の後、今年また流行なり」とある。

このように続々と毎年のように異常気象に伴う災害と疫病の流行が起こり、ついに一七八一年から江戸時代の四大飢饉(寛永・享保・天明・天保)の代表ともいえる大飢饉が起る天明に入る。天明元年の十一月には「十月より今月に至り風病大流行、諸国一同なり」の記事が『日記』にある。更に翌年には五月に娘が痘瘡に罹患、七月には宣長自身が「余、初めて瘡を病み、久しく引き籠もり居り」と記す。「瘡」も疫病の表記の一種である。

天明三年「三-六月京都五畿内寒冷。六-九月下野隠岐陸奥霖雨凶作。七月加賀越中大雨洪水。十二月陸奥津軽飢疫死者多し」、『日記』には、七月に飢饉のきっかけとなった浅間山の大噴火の記事が克明に記されており、年末には「今年冬、寒気甚だし。奥州辺り大凶作、江戸米払底、甚だしく高値。…諸国のうち凶作の国々之有り、就中奥州仙台南部津軽大凶作、南部津軽辺りは餓死者過半の由」、翌四年の正月にも「世上困窮、乞食多し、奥州の飢饉は筆紙に尽くし難し」と続く。

翌四年の気候史の記述は「七月陸奥旱魃。四～八月諸国飢疫（流感）流行死者多数」これは『日記』の年末の記録に「今冬寒気甚だし」と有ることから、傷寒の可能性が高いと思われる。翌五年「六月関東近畿九州旱魃。八月近畿東海道諸国大雨洪水。十-十二月近畿諸国暖少雪」、『日記』にも「今冬の寒気甚だしからず、但し十二月二五六日頃の寒気は殊に甚だし」とあり、全般的には温病流行の可能性が示唆される。

天明六年「三月江戸降雪。関東大風洪水。四～五月筑前旱魃。天明三～七年越後旱魃特に本年大凶作餓死者多数。五～六月諸国冷氣。六月河内・七月関東諸国・十月関東洪水」と異常気象と災害は陸続たり。『日記』には九月六日に台風襲来を思わせる記述があり、年末には「今冬甚だしく暖気春の如し」とある。翌七年の年末記事は「当に冬の寒気強し」と一転して寒かったことが解る。

天明九（=寛政元、一七八九）年には「夏近畿以西旱魃。六月丹波越中肥後岡山木曾・閩六月加賀越中・八月筑後大雨洪水。今年より一八〇〇年迄チフス流行」このチフスは明らかに温病の範疇である。年末の『日記』には「今冬寒甚だしからず」と矛盾しない。地方毎に条件は変わるとはいえ、悲惨な状況が毎年のように繰り返されていることが理解できよう。以後も同様の事態が続くことになる。

当然ながら衛生学、予防・臨床医学などの知識が不十分な当時にあつては、疫病の流行に際し多くの死者が出たであろう。また当然ながら脳血管障害や、心筋梗塞、ガンなどの患者に対するとき、医師として己の治療の限界を思い知ることも多かつたであろう。そこで重要なのは苦しむ患者に向かい、少しでも生きる希望が生まれるように「思いやりの心」をもって接すること、つまり宣長の云う「物のあはれ」が重要になってくるのである。

以上、気候史と宣長の日記を参照してきたが、併せて診療記録である『濟世録』との照合も試みた。だが今回の対象時期と外れており、しかもその記録は自己流に略記されているため、処方記述と思われるところの一部しか判明せず、特に外感病に関する処方の記述は見あたらず、また予後（死亡を含め）に関する記述の有無すら不分明であり、如何ともすることが出来ない。

3、宣長の医学思想

宣長が医学修行を始めて晩年に至る宝暦から享和の間の約半世紀は、古方、後世方、蘭方が鎬を削った時代であり、特に古方派の吉益東洞、山脇東洋、蘭方の杉田玄白、前野良沢等とは同時代人であり、他派からは厳しい論難を受けたことは十分推測できる。

直接医学とは関係ないこととして語られているのだが、寛政十年（六十九歳）の時の著作『うひ山ふみ』（ノ）の項に興味深い文がある。「古風後世風ともによまんとせん、まづいづれを先^{*}にすべきぞといふに、萬の事、本をまづよくして後に、末に及ぶべきは勿論の事なれども、又末よりさかのぼりて、本にいたるがよき事もある物にて、よく思ふに、哥も、まづ後世風より入て、そを大抵得て後に、古風にかかりてよき子細もあり。…後世風をまづよくするときは、是は後世ぞといふことを、わきまへしる故に、その誤^リすくなし。後世風をしらざれば、そのわきまへなき故に、反て後世に落ることおほきなり。…古風をよむ人も、まづ後世風を學びて益あること、猶此外にも有也。…これはただ哥文のうへのみにもあらず、古の道をあきらむる學問にも、此わきまへなくては、おぼへず後世意にも漢意にも、落入^ルこと有るべし。古意と後世意と漢意とを、よくわきまふること、

古學の肝要なり」。

晩年の文なので医学における流派の争いを意識したのではないかもしれないが、最後の文章を読めば、医学流派との関連性も示唆される文章ではある。上述したように宣長は折衷派の流れを汲む後世家別派に属する医師と考えられ、「氣」を重視する立場にあったと言われるが、そのことは彼の唯一の医学思想を述べた文書として伝わる「藤文興が肥へ還るを送るの序」に明かである。これは宝暦六年三月に書かれたもので、未だ開業して実際の診療を行う以前である。藤文興は堀景山の同門であり、肥前大村侯の侍医であり、若年ながら宣長が深く敬愛した医師である。そこ（原漢文）には「素靈は軒岐の大経であり、寿世の大法であるのに、後世の者はこれを無益なものとし、今の医師達は誰も察することができない。扁鵲や王叔和は妄りに作ったし、また宋元明に下っては、固陋であり、僻説を競って起てて、人を眩ますという状況で、世医の愚昧はかくの如く甚だしい」。続いて古方、後世方（彼は近方という）に対し具体的事例を挙げて批判し、「人の病は世につれ変わり、地により異なるのだから、治方もまた然りである」と因人因地、疾病の時代変化に応じて治法を替えるべき事を語る。そして「薬は神が製ったものではないし、方は聖裁の方ではないのだから、必ずしもその規矩に拘泥すべきではない」と古典処方を守ることの危うさを説いている。

次いで最も重視する気について記している。「病というものは軽劑薄薬がよく治せるものではない。ただ熙然とした（筆者注：光り輝く）一氣のみが病に抗し制することができる。氣とは神にして測ることはできず、もとは諸の天より稟け、諸の身に充るのである。後世はこれを元氣と謂い、この氣があつて人に適う。これが無ければ戸ぬ。この氣には盛衰があるので、病や外邪内傷、百爾疾患（筆者注：下書きでは「四百四病」）は皆その盛衰に影響されるのだ。死ぬか生きるかは唯この氣の有無によるのみである」と氣の重視が論じられ、「氣には真邪の違ひがある。当に湯熨鍼灸は、その真氣を助け、其の邪氣を攻めるが、しかし湯熨鍼灸は真氣の政を助けるのであって、自ずから病を攻めるのではない。…氣が病を制治できなければ、司命といえどもどうすることも出来ない。まして草薬では（出来るわけがない）。ただ真氣の趣勢を察すべきであり、薬石は順導し補佐するに過ぎない。その力を資け、真氣を大いに振るわせれば汗吐下もその宜に適い、病は瘳えよう。それなのに真氣の趣くところを察しなければ、妄りに攻撃したり温補して、功無きままであろうし、よく人を賊することにもなろう。治病の枢機は真氣の勢いを察することにある。」
「これを養うの術は他になく、食は薄くして飽にならぬよう、身体は動かすも過勞にならぬよう、思慮は常に寡くすれば、氣の流れは順であり滞らず、四肢末端まで十分に流れる。…経に云うように、上工は氣を平らかにして、というのはこの意味であり、養氣こそが医の至道である」と『靈枢』根結第五を引いて説いている。

氣を重視する思想が時代の風潮を有る程度反映するものであったとしても、宣長の若年に書いたこの記事を読めば、当時の彼の医に対する基本姿勢が何処にあるか理解することができよう。ただこの文が書かれたのは宝暦六年（二十八歳）で、国文学での最初の本格的著作である『排蘆小舟』が書かれた時と同年であることは大きな意味がある。年齢から考えても、この送別の辞を書いた頃の宣長の医学に対する理解は、師の考えや書物を介してのものであろう。既述したように当時は医学の修練の途中であり、まして未だ開業もしておらず、実際の患者を診る機会もさほど多くなかったであろうことからして、臨床家と

しては未熟であったと考えることは、あながち誤りではない。臨床医としての自分の経験を踏まえても、若年時に医の基本が何であるか十分理解できたとは思えない。そういう観点から改めてこの送別の辞を読めば、頭で考えた文章であると言えよう。

ここで改めて確認すべきは、『排蘆小舟』に殆ど「物のあはれ」の言葉が見られないことであり、このことを考え合わせれば、この言葉の持つ意味が臨床医学と大きな関わりを持つと推測することは、あながち荒唐無稽なことでは無かろう。次にこの点を検証する。

4、「物のあはれ」と医学の関わりについて

「物のあはれ」の説は、景山が『不盡言』に指摘した影響をも受けたのであろうが、それと同時に、宣長が源氏物語を精読して、俊成の歌の根本に遡って得た思想である^⑤、と説かれる。朱子学を講じる儒者とはいうものの景山は風変わりであり、「君主は人情、特に恋の情に通じることが肝要」と述べるなど『不盡言』で独特の論を展開している。宣長に与えた影響は非常に大きいと考えられるが、中でも次の字句は重要である。「仁と云ものは人の本心なるゆへ人情に通ぜずして仁は求め得べからざることも也。人情を知るは、仁を求む手がかりにして、学者最初の工夫なり。孔子の能く近く取りて譬ふるは…と云ふは、即ち恕の事なり。恕は即ち仁を求むる方術なれば、人情に通ずると云は、即又恕をいたすの方術と知るべし」と言い、その人情を知るために学ぶべき書は『詩経』であり、『万葉集』であると展開する。彼は『詩経』の鍵詞を「思い 邪 無し」という孔子が断章取義して引用した語に求め、これを感じるの善悪の分別以前の心情として重視する^⑥。

また松阪での開業の翌年（宝暦八年五月）に『安波禮辨 紫文釋解』（全集、第四巻）の稿を起し、その冒頭に「或人、予ニ問テ曰、俊成卿ノ歌ニ 戀セスハ、人ハ心モ無カラマシ、物ニアハレモ、是ヨリソシル、ト申ス此ニアハレト云ハ、如何ナル義ニ侍ルヤラン」と、俊成の歌意を聞かれたことが「物のあはれ」を深く考えるきっかけになったと自分で記している。こういった展開を踏まえた上で、宣長は医師としての経験を通し「物のあはれ」論を極めたと考えるのだが、先を急がずもう少しじっくり彼の考えを検証することにしよう。

既に述べたように「物のあはれ」の言葉が多出するのは宝暦十三年（三十四歳）の時、後の『源氏物語玉の小櫛』の初稿ともいえる『紫文要領』（全集第四巻）と、それに次いで書かれた『石上私淑言』（全集第二巻）からである。以下『石上私淑言』文中で関連すると思われる字句を列記してみよう。

卷一、一二「問云。もののあはれをしようとはいかなる事ぞ。答云。古今序に。やまと歌は。ひとつ心をたねとして。萬のことはとぞなれりけるとある。此ころといふがすなわち物のあはれを^{ココロ}する心也。…すべて世中にいきとしいける物はみな情あり。情あれば。物にふれて必おもふ事あり。…さまざまにおもふ事のある是即もののあはれを^{ココロ}する故に動く也。…されば事にふれてそのうれしくかなしき事の心をわきまへしるを。物のあはれを^{ココロ}するといふ也。…物に感ずるがすなはち物のあはれを^{ココロ}する也。感ズルとは。俗にはよき事のみに共さにあらず。感ノ字は字書にも動也と註し。感傷感慨などともいひて。すべて何事にて。事にふれて心のうごく事也。…さて阿波禮^{アハレ}というは。深く心に感ずる^{ココロ}辞也。…阿波禮は哀の心にはかぎらぬなり。…阿波禮はもと歎息の^{ココロ}辞にて。何事にて心に深

く思ふ事をいひて。上にても下にても歎ずる詞也。…又漢文に嗚呼于嗟猗などの字を阿々^{アア}とよむ事多し。この阿々も同じ歎詞也。…さて阿波禮牟^{アハレム}といふ詞はあはれと思う心也。かなしと思ふをかなしむといふ格也。されば是もすべて深く心に感ずる事をさして。なにをあはれむ。かをあはれむといふ也。

拾遺集 春はただ花のひとへにさくばかり物のあはれは秋ぞまされるかように體にもいふ也。さてかくのごとく阿波禮といふ言葉は。さまざまいひかたはかりたれ共。其意はみな同じ事にて。見る物きく事なすわざにふれて。情の深く感ずることをいふ也。俗にはただ悲哀のみあはれと心得たれ共。さにあらず。すべてうれし共おかし共たのし共かなしともこひし共。情に感ずる事はみな阿波禮也。…されば物のあはれしるを。心ある人といひ。しらぬを心なき人といふ也。西行法師の

心なきみにもあはれはしられけり鳴たつさはの秋にゆふくれ
此上句にてしるべし。」(九十九～百七頁)

卷二、六七「問云。世中になしき子をさきだてて。思ひ歎く親の有さまを見るに。父は猶のどやかにおもひしづめて。さまよく見え。母はひたふるにふししづみて涙にくれまどひ。かたくなしき事共をいひつづけて泣きさまよふを思えへば。猶はかなしくめめしきは。女わらべのしわざならずや。

答云。さる事ぞかし。父のさすがにさまようおもひしづめたるは。げに雄々しくいみじきことにはあめれど。そは人めをつつみ世にはづるゆえに。かなしき情をおさへて。あながちにもてつけつろひたるうはべ也。又母の人めもおもはでひたふるになきこがるさまは。まことに女々しく人わろくは見ゆれど。これぞかざらぬ眞の情にては。有ける。さればさまよく堪忍ぶとしのびあへぬとの。うはべのけぢめこそはあれ。心のおくは父も母もかなしみの深さ浅さのかはるべうもあらねば。まことにはいづれをかしこし共おろか也とも定むべき事にあらぬ中にも。」(百五十三頁)

卷三、七九「答云。…すべてとくいかめしく勢ひある人は。なにごとも心に物のかなふゆえに。身にうき事をしらねば。よろづ思ひやりすくなくして。賤しく貧しき者のつねにおもひおほき事をも。もしはかりてあはれと思ふ心のつかぬもの也。…この物のあはれといふ事をしらぬ人は。よろづに思ひやりなくして。心こはごはしくなさけなき事のみ多き物也。…人の情のやふを深く思ひしるときは。をのづから世のため人のためにあしきわざはせぬ物也。これ又物のあはれをしらす功德也。かく人の心をくみてあはれと思ふにつきては。をのづから身のいましめになる事もおほかるべし。」(百六十六～百六十八頁)

ここで最後に述べられていることは、医療の基本である「思いやり」についてである。『紫文要領』ではより具体的に次のように記す。「人の哀なる事をみては哀と思ひ、人のよろこぶをききては共によるこふ、是すなはち人情にかなふ也。物の哀をしる也。人情にかなはず、物の哀をしらぬ人は、人のかなしみをみても何共思はず、人のうれへをききても何共思はぬもの也。かようの人をあししとし、かの物の哀を見しる人をよしとする也」(三十八頁)。ここに明らかにされた他者への思いやりが、儒教的な概念の「恕」に相当することは既に指摘されている^⑤。

吉川^⑥は宣長の「物のあはれ」論を引いて次のように記す。「哲学的人間であろうとして、ただちに哲学を求めるときは必ず誤謬におちいる。この誤謬におちいらぬものとして、宣長はその方法を提示する。すなわち、感情の感動によつてものの本質に接触するこ

と、それが哲学への必須の前提となる。彼の言葉でそれを物のあはれを知るという。またその修練のためには、感情の言語である詩、また小説こそ、まず読まらるべきだとする。またみずからも歌を作る。それを彼の言葉では雅の趣を知るという。この準備を必須としてのに、道の書を読んでこそ、道は把握されるとする。…事がらの前提として、感情は人間心理のうちもっとも重要なものとする思考があるであろう」と。哲学的人間たらんとして説かれた道は、まさに医師としてもっとも重要な素質である「思いやりの心」を豊かに持つ人間を如何に育てていくべきかの答えとも重なり、ここに見いだせるであろう。医師の質が問われている現代において、耳を傾けるべき言葉である。

5, まとめ

一、医療の基本とすべき思考は仁恕であり、この漢^{からごころ}意を大和言葉で表現すれば「物のあはれ」である。

二、宣長が「物のあはれ」を重視するに至る過程で、実際の臨床経験が重要な働きをした。

三、宣長在世中も気候不順による災害、また疫病の発生などを含め、感染症や脳血管障害を初めとする疾病により、十分な治療を施せないままに死亡する事例は多々あったと推測しうる。そこに有るべき医療者の姿勢は、患者への思いやりであり、ここから「物のあはれ」の論理の重要性が見いだせる。

6, 文献

1, 松島博：本居宣長の医術と環境、三重大学教育学部研究紀要二五(二)五～二九、一九七四年

2, 高橋正夫：経験の医学（その1）、日本医史学雑誌二五(三)二四四～二五八、
昭和五十四年

（その2）、日本医史学雑誌二五(四)四一三～四四五、
昭和五十四年

高橋正夫：本居宣長の醫論、杏醫教研究報告二、三一～四九、一九七五年

高橋正夫：春庵考、杏醫教研究報告四、一二一～一四五、一九七七年

3, 佐佐木信綱：増訂 賀茂真淵と本居宣長、二〇四頁、湯川弘文社、昭和十年、東京

4, 石田秀実：劉医方という誤解、山田慶児、栗山茂久共編『歴史の中の病と医学』一二四―一三三、思文閣出版、一九九七年、京都

5, 文献㊦と同じ、一三一～一三二頁

6, 小曾戸洋：日本漢方典籍辞典二四七頁、大修館書店、一九九九年、東京

7, 堀景山（正超）：堀元厚著『隧輸通攷』の跋、臨床鍼灸古典全書収載

8, 大野晋：醫者としての本居宣長、全集第十九巻解題一二～一三頁、筑摩書房、昭和四十八年、東京

9, 小高修司：蘇軾（東坡居士）を通して宋代の医学・養生を考える、日本医史学雑誌五〇(三)：三四九～三六九、二〇〇四年

㊧, 小曾戸洋（文献6と同じ）二九一頁

㊨, 中央气象台・海洋气象台編：日本の気象資料（1）（2）、原書房、昭和五十一年、東京

㊩, 佐佐木信綱：賀茂真淵と本居宣長、二一三頁

㉓, 日野龍夫校注：不仁言二〇〇～二一八頁、新日本古典文学大系九九、岩波書店、二〇〇〇年、東京

㉔, 相良亨：本居宣長八四～八七頁、東京大学出版会、一九七八年、東京

㉕, 吉川幸次郎：本居宣長の思想、『本居宣長』二三五～二三六頁、筑摩書房、昭和五十二年、東京

A s t u d y f o r " M o n o n o - a w a r e " o f N O R I N A G A M
O T O O R I K O T A K A S H U J I, M. D. & P h. D.